

# A. 授 業 研 究

都築 亨 鈴木 一悠 飯島 幸久

鈴木 克彦 ※北田 明子

## I. 中学生・高校生の授業に対する構え

都 築 亨 北 田 明 子

### 1. われわれの共同研究のねらい

『授業』は学校の生活にあって最も中心的な場面である。最も日常的な営為である。このところその『授業』の効率があがっているとは思えない。からまわりしている面がかなり多く目につく。受験勉強ということを除くと、生徒たちの教科の『授業』に対する姿勢はかなり消極的になってきているのではないと思われる。授業中におしゃべりが多い。学習意欲があるのか、ないのか。何のために勉強しているのか。その学習の目的もはっきりしない。惰性で学校へ来ているのではないと思われる生徒も随分いる。

この学校だけの問題だとしたら本校の指導方針の問題である。このごろの日本の一般的状況だとしたら、力をあわせてその原因を究明する価値のある大きな問題である。とにかく各教科の個別的な学習指導の方法や内容を考える前に、教科を越えて共通な問題としてこのごろの生徒の『授業』に対する意識や姿勢……授業への構え……がどのようなものか、はっきりさせたいと意図してこの調査をすることを考えた。本校では色々な観点からほぼ2年おきぐらいに学習意欲などについてのアンケート調査を試み、そのあたりの問題を究明してきたのであるが、最近生徒たちの中にはかなり大きな変化が起っているようにも感じられる。『授業』に対する構えがそれほど変わっていないのに授業がしにくくなっているとしたら、それはそれで大きな問題だといわなければならない。

### 2. 『授業』に対する興味・関心

ごく普通に『授業』についての好き嫌いをアンケートするところから始めたい。

一般的な形ではあるが中学・高校別に「好きな科目」「嫌いな科目」は何か、答えさせ、それぞれについてその理由をあげてもらった。

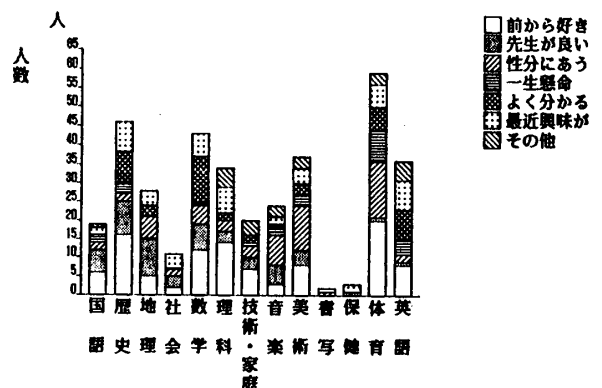
#### 1 興味の持てる教科とその理由

興味のある教科をそれぞれ3つずつたずねた結果は次のとおりである。そしてその理由としていくつかあがっていた回答を次の7つにまとめてみた。

- ①前から好きだった ②先生がよく教えてくれる。
- ③自分の性分によくあっている。
- ④一生懸命勉強しているうちに興味が持てるようになった。 ⑤よくわかる科目だから
- ⑥最近興味が持てるようになった。 ⑦その他。

その結果は次の通りである。

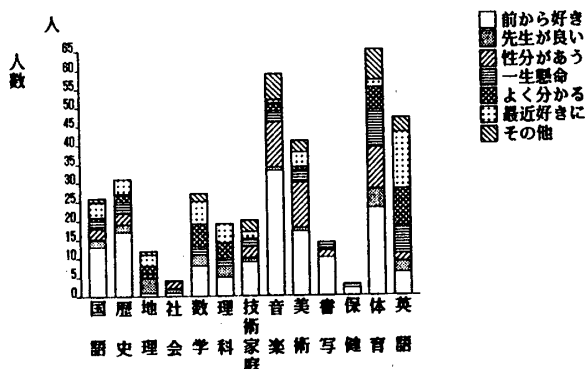
#### (1) 中学男子



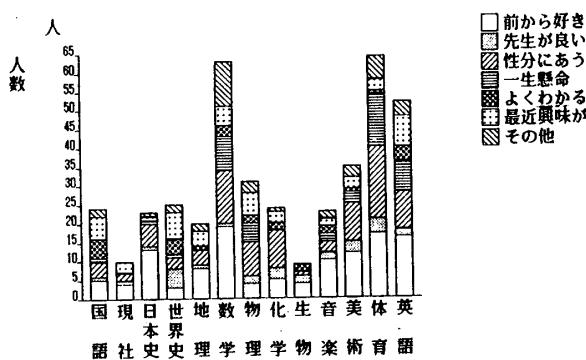
※ 62年4月より松蔭女子短大へ転出。

# I 中学生・高校生の授業に対する構え

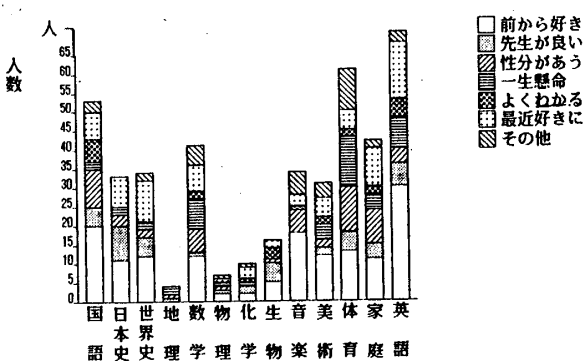
(2) 中学女子



(3) 高校男子



(4) 高校女子



高校生と中学生の教科への興味は大きく見れば、数年前と変わっていない。

高校の男子で数学の好きな生徒がやや増加し、中学での英語への興味がかなり増してきたと言ってよいかも知れない。学年別に検討を加えると、特に中1での英語への興味は極めて高い。

高校・中学を通じて男子と女子とでかなり共通した反応が見られる。ただ中学女子の国語がやや少ないのはどうしたものか。判断に苦しむ。

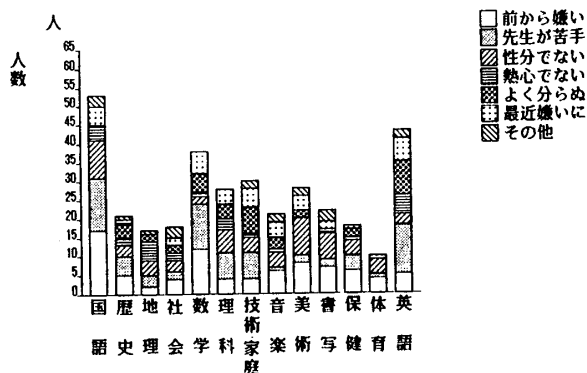
男子と女子との間にはかなり多くの相違点がある。最近好きになってきたという数が比較的多くなっている教科が目につくし、その原因を探ってゆけば学習意

欲が高められるきっかけをつかむことが出来るようにも思う。

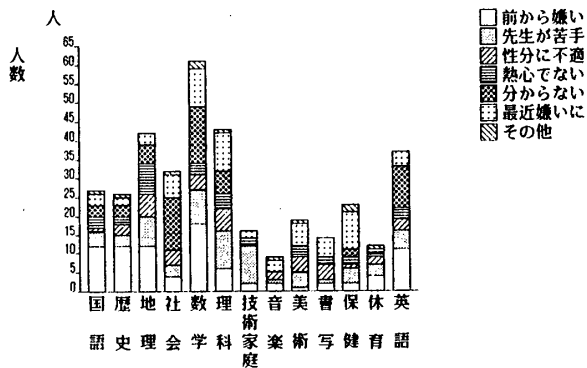
## 2. 嫌いな教科とその理由

嫌いな科目についても大体の傾向は以前と同じである。以前よりも、よりはっきりしてきたといってよい。高校男子の国語・英語が目につくし、女子は数学が苦手である。気になる所はその理由である。男子の国語嫌いの理由の第一は先生の問題であり、英語と女子の数学の嫌いという原因は内容が分からないからである。たぶんにわかりきったことのようにであるが、やはり改めて問題にすべきことであろう。

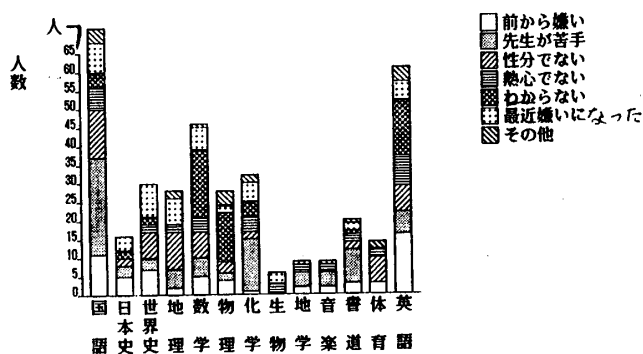
(1) 中学男子



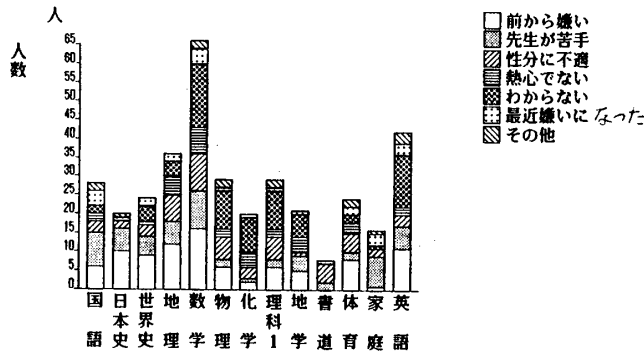
(2) 中学女子



(3) 高校男子

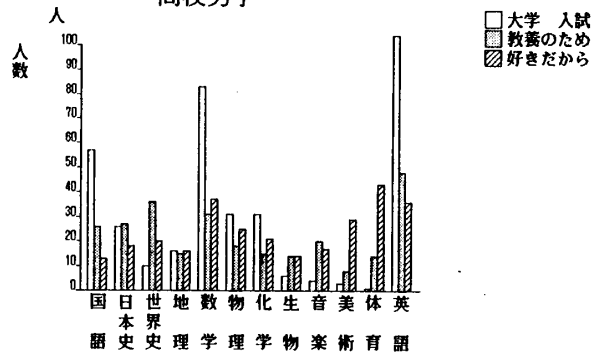


(4) 高校女子



(2) 何のために勉強するか

高校男子



### 3. 教科の『授業』に対する生徒の構え

#### 1 授業への構え・目的

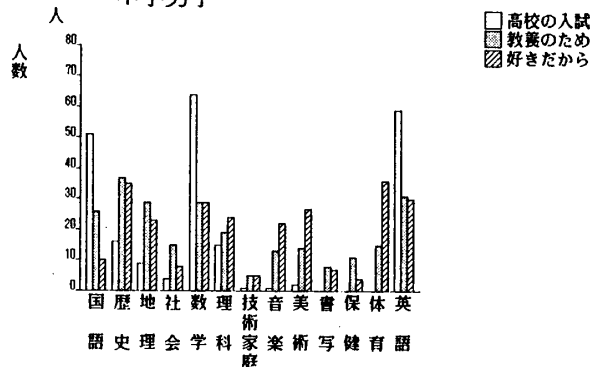
生徒達は何のために学校でそれぞれの教科を勉強しようとしているのか、いくつかの目的・構えが各自にあるのだろうが、一応次の4つに分けさせて見た。

- ①大学(中学の場合は高校)受験のためなのか
- ②自分の教養として身につけておきたいという程度のものなのか
- ③その教科に興味があり、好きだから勉強しているといえるのか
- ④学校の指定(必修)で仕方なく勉強させられている教科なのか

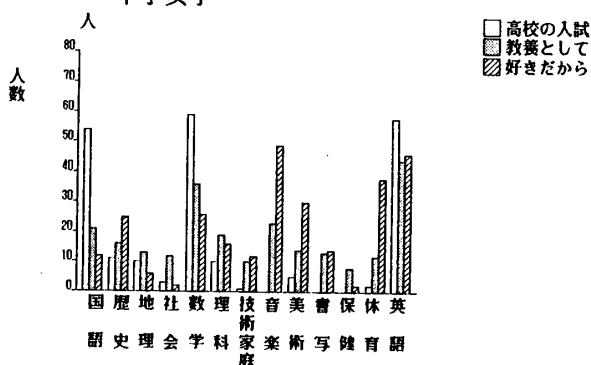
それぞれの目的ないし構えを先にあげ、その構えで勉強していると思う教科を3つずつあげさせた結果は次の通りである。

(1) 何のために勉強するか

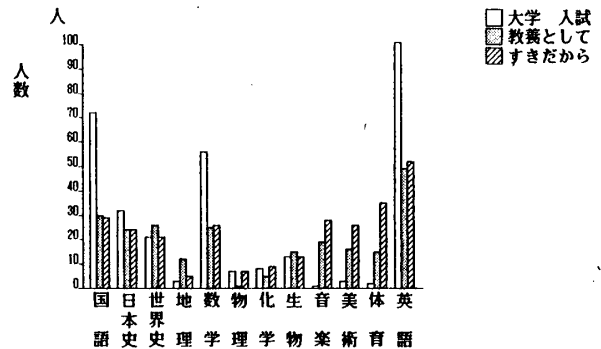
中学男子



中学女子



高校女子

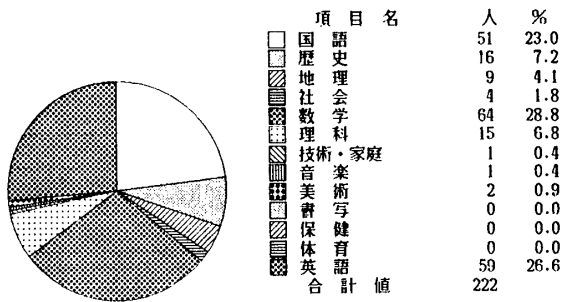


中学・高校を通じて、国語・数学・英語はほぼ半数の生徒が入試を意識して『授業』に臨んでいる。入学試験のためだけに高校・中学の教育が考えられてよいだろうかという議論が一方にあるが、当面それは不問に付して置きたい。問題は他の科目の勉強の構えである。入試にはないから勉強しなくてもよいという気持ちの多数の生徒たちをどのようにして授業に引き込んでゆけるかということである。社会科では「自分の教養として」(「好きだから」という数値とほとんど変わらず、中学女子の歴史では「好き」のほうが優越するが)、理科については「好きだから」(高校の理科は少ないが)という数が『授業』の支えになると思われる。「理科」、「社会」については如何にして授業内容への興味を育ててゆけるかということが、授業のポイントであろう。

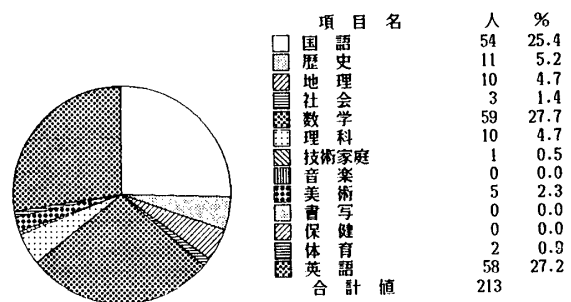
# I 中学生・高校生の授業に対する構え

## (3) 高校入試に備えて勉強しているのは

### 1) 中学男子

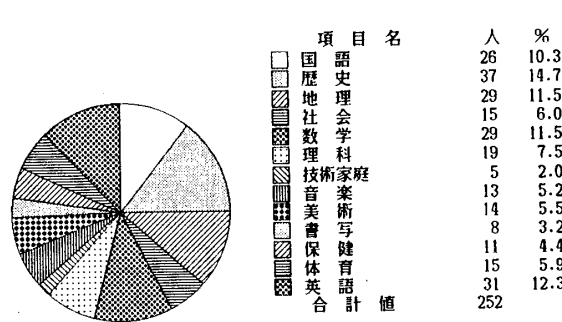


### 2) 中学女子

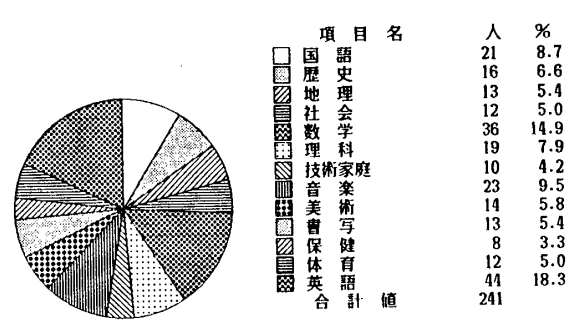


## (4) 自分の教養として勉強しているのは

### 1) 中学男子

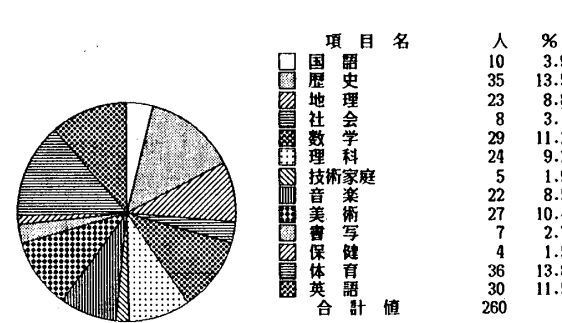


### 2) 中学女子

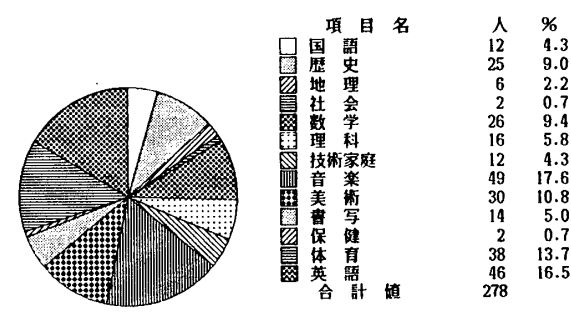


## (5) 好きだから勉強しているもの

### 1) 中学男子

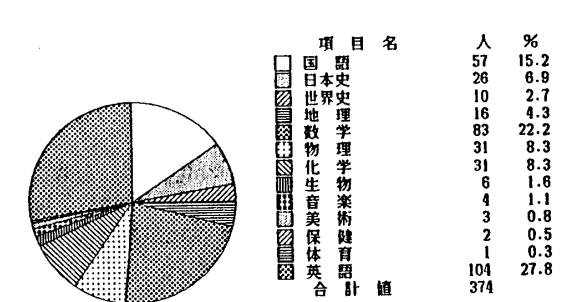


### 2) 中学女子

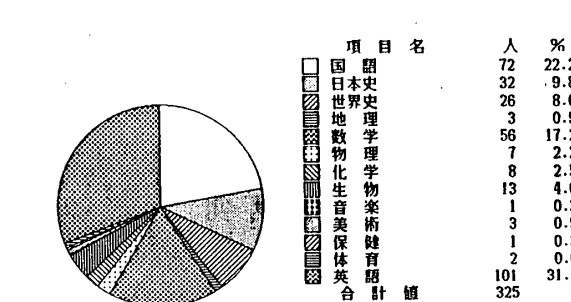


## (6) 大学入試に備えて勉強しているのは

### 1) 高校男子

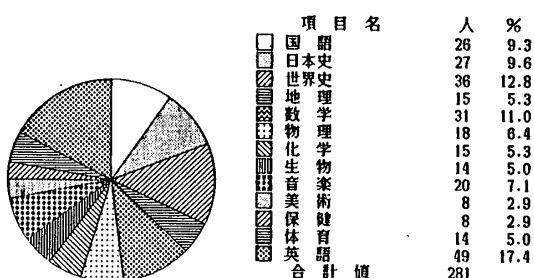


### 2) 高校女子

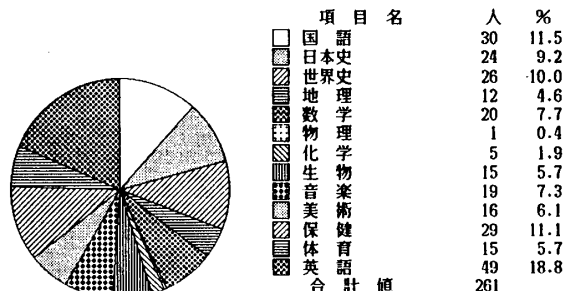


(7) 自分の教養として勉強しているのは

1) 高校男子

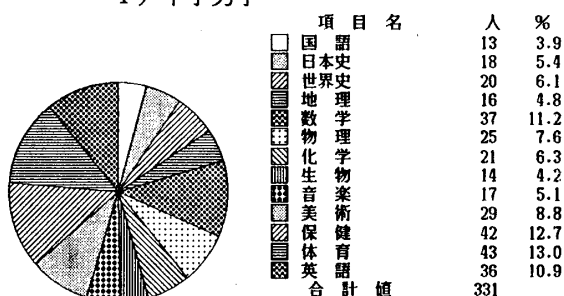


2) 高校女子

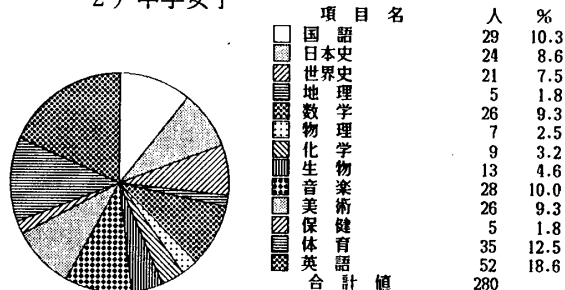


(8) 好きだから勉強しているもの

1) 中学男子



2) 中学女子

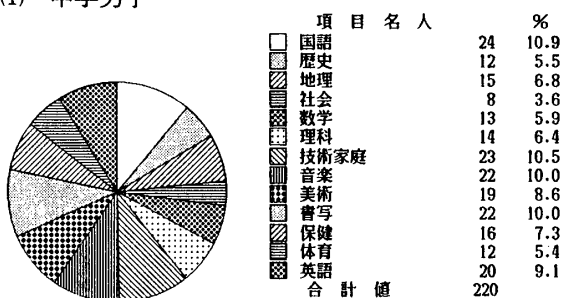


以上に見られるように一応前向きに授業に臨んでいるのは問題はない。問題は授業に全く背をむけて、仕方なく出ている生徒が増加していることである。

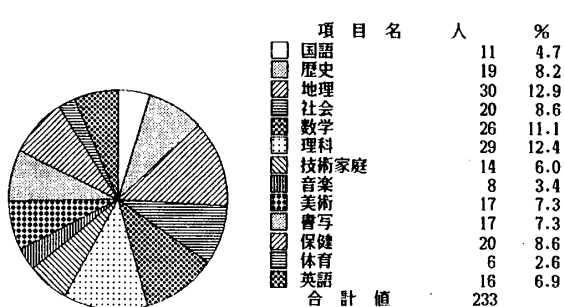
方なく出ている生徒が増加していることである。

2 『義務だから仕方なく』勉強している教科は

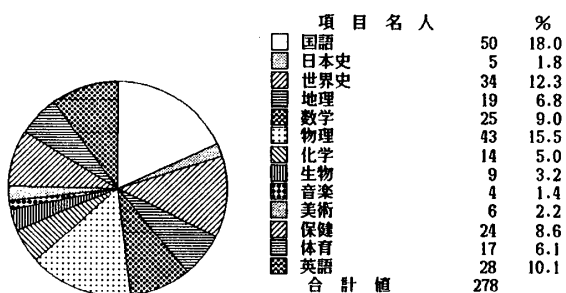
(1) 中学男子



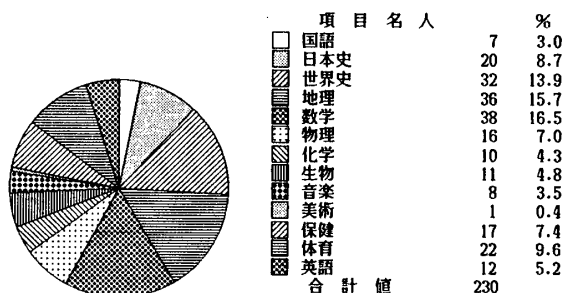
(2) 中学女子



(3) 高校男子



(4) 高校女子



## I 中学生・高校生の授業に対する構え

授業中に「やる気」が無かったり、学習意欲の感ぜられない生徒が気になる。学校から（あるいは文部省から）強制的に勉強させられて、いやいやながら勉強しなければならない、出来たら『授業』をうけたくない、そういう生徒が増加している。興味を持たせようにも、そのとっかかりが出来ないのである。以前だったら高校へ進学して来なかった生徒たちが多数進学してくるのだから当然と言えば当然であるが、学力のある生徒でも入学試験にない科目は身を入れて『授業』に臨まない。普通科の生徒たちにとっては入学試験だけが高校教育を支える柱になっており、一方に高校には殆んど進学したくないのに親の見栄と社会の風潮だからということでは仕方なく高校にきている多くの生徒たち（その生徒たちにとっては学校はひまつぶしの場所以外の何ものでもなく、卒業証書だけが目標にかかっている。）がいる。困った現象である。そして学校自体その日本の社会に於ける構造的な位置づけと存在理由は明治以来変わらない面があって、基本的には戦前の教科教育の考え方を殆ど惰性的に継承し、したがって教科・科目の観念は明治以来変わっていない。（戦後の教育の発足に当たって、多少の教科観の修正はなさ

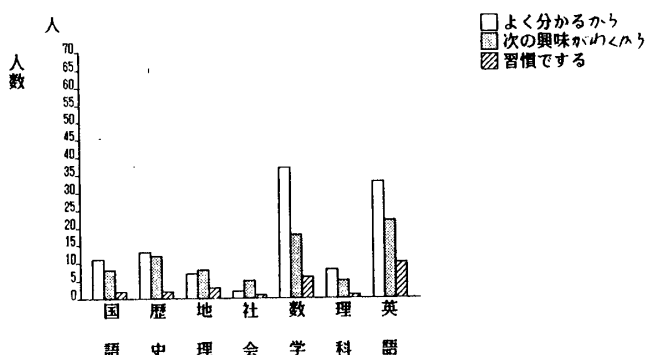
れたとはいふものの学校教育にはこうした内容は必須であるという頑迷な固定観念は改められていない）それがこの十数年の経済発展とそ中で育った子供たちの意識との間によりやくずれを生じてきた、その結果がこれに加算されてくるとどうにも困った状況が生じて来る。このあたりでアメリカのように「車の運転技術」だとか「ヘア・デザイン」など子供たちに興味があり、社会的にも必要な新科目を含めて大胆に学校教育を改造しなければならない時期に差し加かってきたのではないと思われる。入学試験の科目についてもそうである。

### 4. 教科と予習・復習の必要性 —何の為に予習するか—

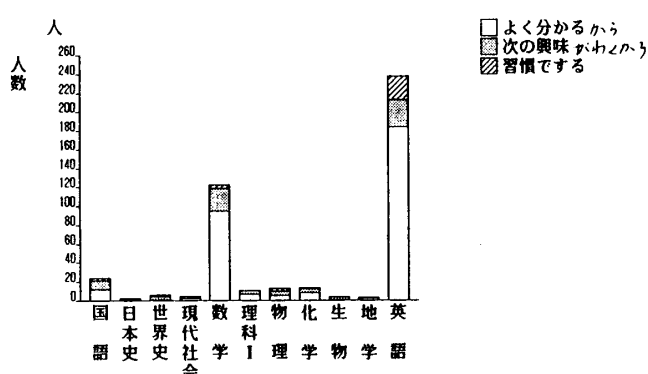
中学校の『授業』に予習はそれほど必要ではないという見方がある。予習なしに授業にのぞんだほうが「新鮮さ」や「おどろき」をもってその知識を受け入れることが出来るのではないか、ということである。本校の校内の研究会議でも英語の『授業』では中学に関する限り、予習は不必要ではないかという点が論議されたことがある。

(1) 予習している科目

中学全体

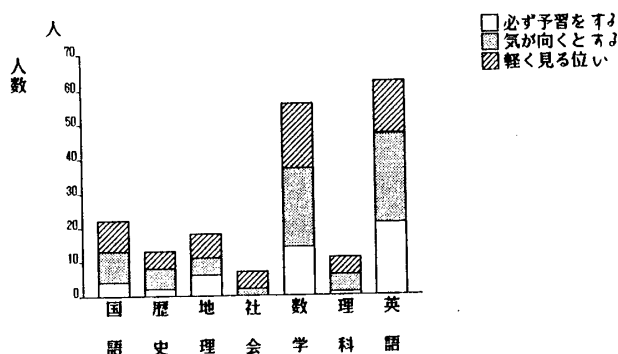


高校全体

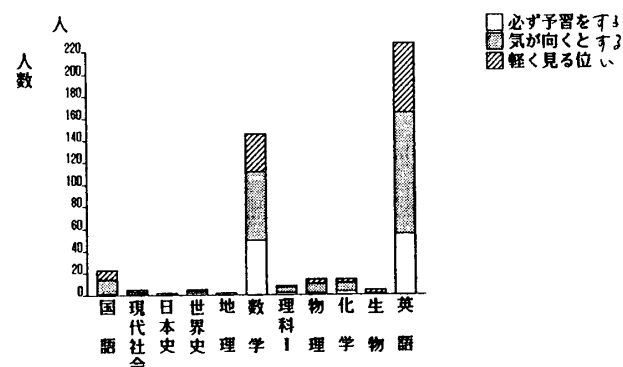


(2) 予習の程度

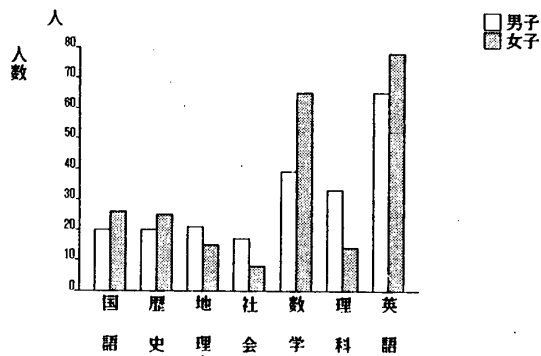
中学全体



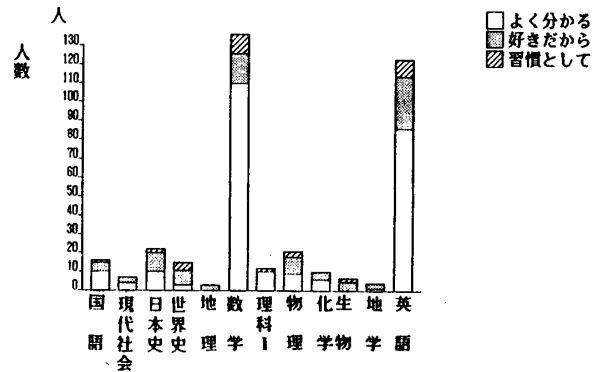
高校全体



(3) 復習をしている科目  
中学全体



高校全体



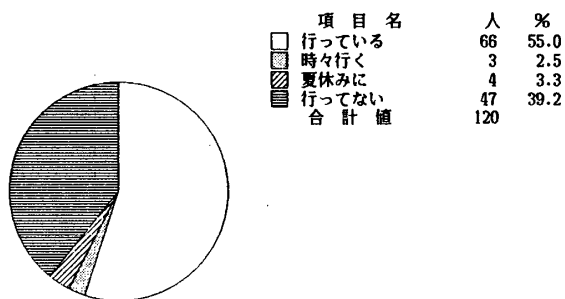
しかし、高校に関しても、英語・数学が予習の科目とされているのはほぼ一般的現象である。たしかに英語・数学については予習しないとよく分からないということはだれしも認めている所であろう。

むしろ、今回の調査の場合、毎日必ず予習をすると

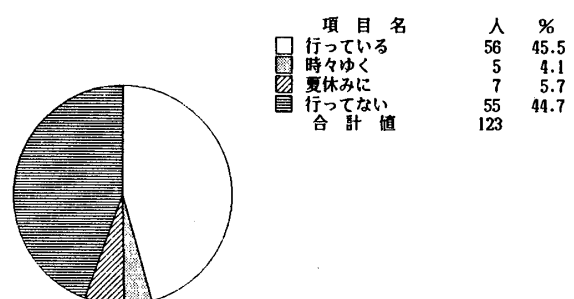
いう生徒の数が、あまりにも少ないことが問題とされるべきであろう。塾とのかかわりで考察すべきことの一つである。その予習の程度も気が向くと時々するというのが中学・高校を通じて最も多い。

5. 塾へ行っている生徒の『授業』への構え

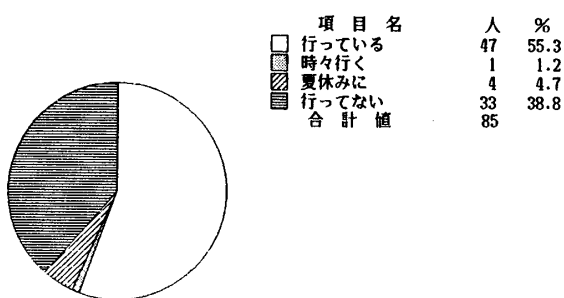
(1) 中学男子



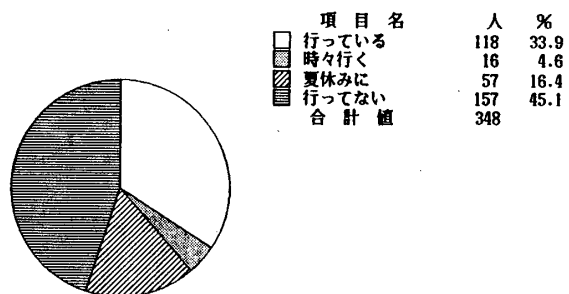
(2) 中学女子



(3) 中学3年

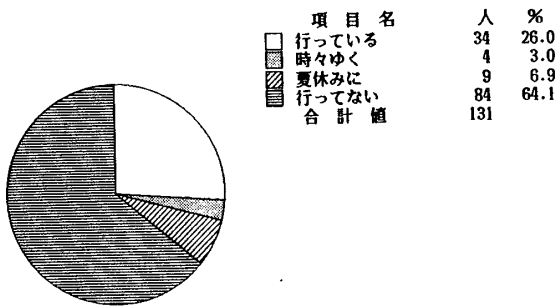


(4) 高校全体

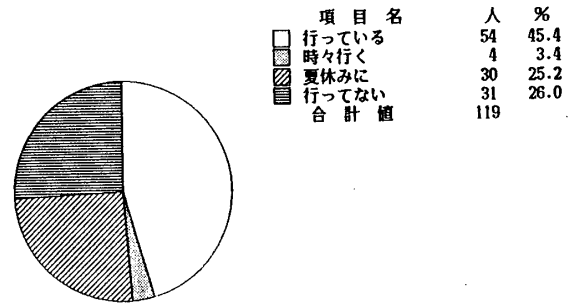


# I 中学生・高校生の授業に対する構え

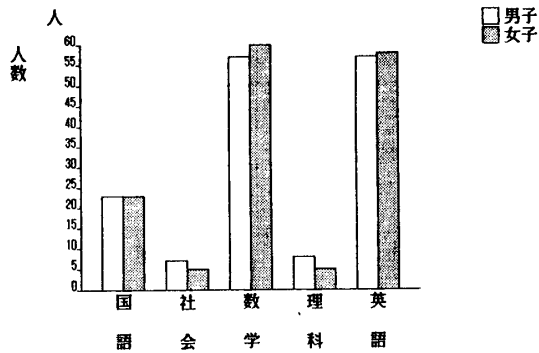
(5) 高校1年



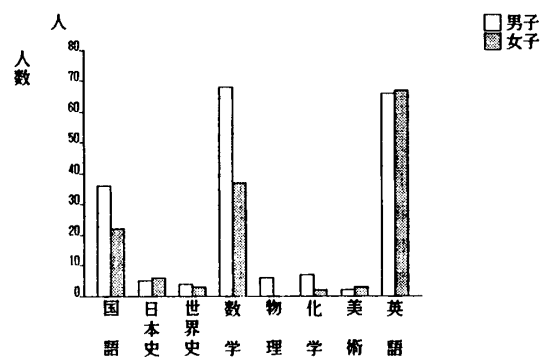
(6) 高校3年



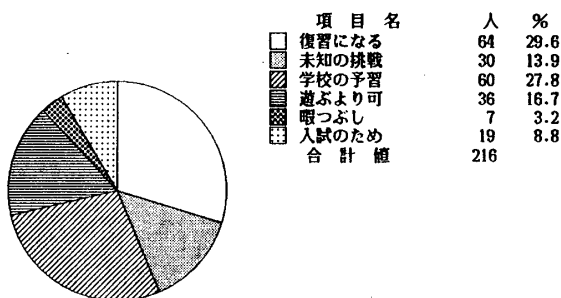
(7) 塾での学習科目  
中学全体



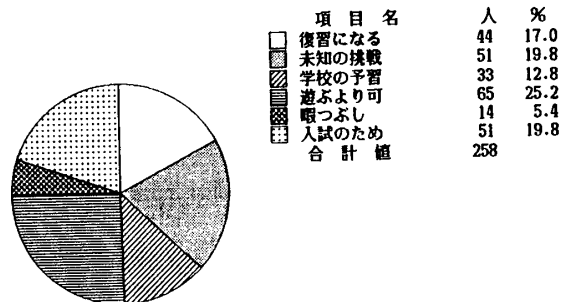
高校全体



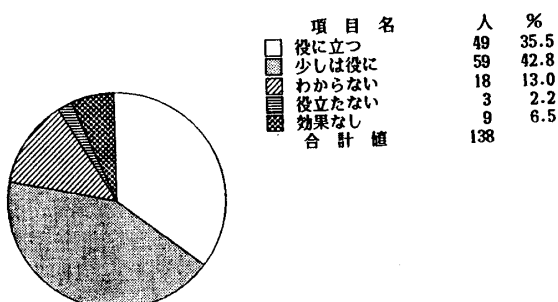
(8) 塾の勉強の位置づけ  
中学全体



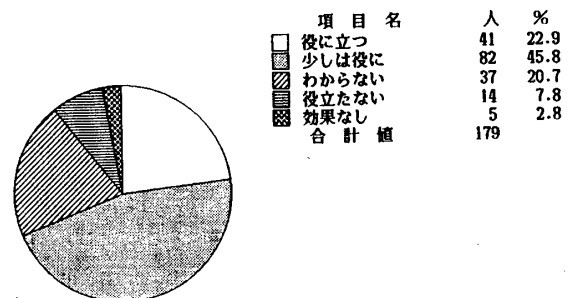
高校全体



(9) 塾の勉強の自己評価  
中学全体



高校全体





高校生のほぼ3分の1、中学校の生徒たちのほぼ半数のものが何らかの形の塾に通っていると思われる。これは本校の教育にとってどのような意味を持っているのだろうか。明らかにマイナスになっていると思われる。『授業』に出ていても熱心に聞いていない生徒のかなりのものは塾でもうやっているか、あるいは塾が本当の勉強で学校は息抜きの場合でしかありえない。学校教育は崩壊しているのである。

学校を復権させる道は塾よりも学校教育を魅力あるものにする以外にはない。

文部省の「学校教育の中で補習を」という問題提起は現状ではしかたのないことかもしれないが、むしろ「補習を廃止して本来の教育を」といいながら、その実本来の教育が何かを指摘出来なかった文部省・日教組の責任こそ批判されねばならないことである。そしてそれは勿論われわれ教師の怠慢でもあった。補習は邪道に違いないが、学校教育の中で補習がなされないから、現在の塾の盛況をもたらしたのである。小学校の場合だったら、何よりも『授業』への興味を高め、面白く『授業』をすることが授業の要諦であろう。ただ、中学から高校段階の年齢層の生徒に対して、その上にどのような配慮を加えることが必要なのであろうか。どうすれば学習の興味を高めることが出来るのだろうか。……一寸面白い話をすれば多少興味を示す、がそこから教科の本質的内容に入るともう俺は関係ないよという反応を示す生徒たちを『授業』の中でどのように活躍させるか、とどのつまりどのようにして意識と体を『動かす場』を設定出来るかということである。

理科の実験や観察も一つの場面だし、社会科での野外学習もその観点から評価されねばならない。

もう一つは生徒たちのお互いの関係を利用すること、

例えば生徒たちの競争心をくすぐってはげみをあたえることである。校内の研究会議で三枝孝弘教授から指摘されたことのひとつに、中学や高校の授業ではお互い同士の鍛えあう場面を作り、競争をさせながら自分自分の力をつけてゆく場面を設定したらどうか。そして、いま一方で課題や宿題あるいはレポートなどの提出物、又はテスト等を出させたらすぐに返すとか評価をすぐにもどしてやる、即ちフィード・バックすることが大切である。ということがあった。この学校では点数主義によって競争させることはしないという建前でまた事実他の学校と比べると間違いなく宿題の出し方も少ない方だと思われる。にもかかわらずそうした自由さが裏目に出て、塾通いが多くなり、このごろ特に中間・期末の試験での1点でも点数を気にする子供が多くなってきたように思われる。建前としての附属の教育は崩壊しているのである。補習教育についての一般の受け止めと同じである。試験よりむしろ日常の『授業』の場で、お互いを競争させ、はげましあわせ切磋琢磨させる場をつくることが緊要であろう。

## 6. ま と め

『授業』に対して興味をもたせること、生徒同士の関係を上手くつかむこと、切磋琢磨する場面を作ることと一口に言ってもなかなか難しいことである。理科や社会科では学習場面への興味をどのようにもたせられるか。ということであろうが、中学校以上の教育の場合は単に面白くというだけでは興味の持続性につながらない。一方において「今の」子供たちの指向に合うように教育内容を改造し、現代化をはかるとともに、一方、テレビや塾、その他現在子供たちの心を支配している様々の状況に対抗出来るような学校教育の再編成・体制づくりが必要であろう。